

# 石巻復興 NEWS

石巻専修大学 経営学部 丸岡ゼミ 平成 24 年 3 月 31 日発行 第 9 号

## 水産加工企業再建の課題

「新しい工場と機械を買って生産すると、減価償却費がかかるので、価格競争できません」

山徳平塚水産株式会社社長の平塚隆一郎さんのこの言葉は、石巻圏の水産加工業の置かれている状況をよく表わしています。

これは、3月23日に石巻専修大学で開催された東日本大震災後の水産業の復興方法を検討する会議での発言です。平塚社長は水産加工業の将来構想を検討する委員会の代表を務めている、いわば水産加工業界の次世代のリーダーです。おでんの具など、練り製品の製造が本業です。各種の受賞を果たした「お魚プリン」など新製品開発にも熱心です。

東日本大震災前、石巻市の旧北上川の東にある魚町（さかなまち）には、大中小約 200 の水産加工工場がありました。昨年 3 月 11 日にここを襲った大津波で、ほとんどの加工工場は被害を受けました。魚市場も大きな被害を受け、しばらく水揚げできない状況でした。

魚町の水産加工場には魚を冷凍保存するための冷凍庫が数多くありましたが、津波により装置が壊れたり、電気が届かなくなったりしたために、時間がたつとともに、庫内の魚は腐り始めました。

衛生環境は劣悪でした。5月から6月頃、石巻市はハエが異常に多く発生していましたが、その一因は魚町の腐った魚にウジがわいたことと言われています。このような魚を海へ捨てることは法律上認められていませんが、その廃棄量の多さと衛生環境改善のため、特別の措置として海への投入が認められました。

平塚さんは自ら、腐臭一杯の魚町で魚の処理を行いました。一日の作業を終え自宅に帰ると、衣服と身体の悪臭はすごいものでした。玄関ですべての服を脱ぎ、匂いがかからないよう家族の服とは分けて洗濯したそうです。



震災前の山徳平塚水産工場内部（2009年7月）



津波被害後清掃された工場内（2011年9月）

このような水産加工業者の努力の甲斐もあり、冷凍庫内の魚は取り除かれ、市内に発生していたハエも夏以降減り始めました。

魚市場も応急処置がなされ、水揚げは小規模ながら回復しましたが、地震後、地盤が沈下したため、水産加工場は一部しか再建が進んでいません。

平塚さんが減価償却を問題にするのは、水産加工場が古い設備で成り立っていた産業だからです。石巻の水産業が活気にあふれていた黄金時代は昭和 30 年代から 40 年代だったそうです。その後設備を新しくしていない企業が多く、震災前にはすでに減価償却を終えた古い機械を使って生産をしていたのです。

減価償却を終えていれば設備費を気にする必要がないので、価格を下げてでも利益を確保しやすく取引先の求めに応じた値引きがしやすくなりますが、終えていなければ値引き交渉に応じることは難しくなります。

石巻の加工業者が納品先としていた企業の多くはすでに他の業者との取引を始めているため、経営再建には、新規の取引先開拓が必要となります。取引相手の求める価格に応じられなければ、生産しても商品の納入先がなく、新しい工場と機械の設置が無駄となります。

減価償却費の問題は、経営者に廃業を決心させる引き金となる問題なのです。

石巻の水産加工業の経営者たちは、これまで一匹狼的な経営をしてきた場合が多く、他の会社との協力関係は少なかったようです。しかし、今回の大きな困難に際しては、協力が必要になると思われます。

加工業者たちは共同作業場での企業再建を計画しています。ここでは、心配される放射線量の問題を克服するため、測定器を備えているそうです。これも、個々の業者では対応しきれない問題で、協力が必要です。

価格勝負ができないなら、望みは製品のブランド化・高付加価値化による高値での販売です。山徳平塚水産は震災前からすでにある程度の知名度を備えているため、石巻専修大学の石原慎士先生の紹介を得て、自社ブランド製品を八戸市の水産加工場で生産する OEM 生産を実施しています。

しかし、このような高付加価値化のできる会社は魚町の加工場のごく一部にすぎません。水産加工業の再建には、営業力の強化も不可欠だと思われます。

（丸岡泰）

## 「東北発☆未来塾」の撮影

去る2月28日、NHKが今春から新しく放送する番組「東北発☆未来塾」の初回放送の撮影が石巻専修大学で行われました。この番組は、東北の未来を担う大学生を始めとした若者が、さまざまな業界で活躍する講師から学んでいくというもので、私（内海）を含め丸岡ゼミの二年生数名も今回の撮影に参加してきました。

番組の撮影当日、集合場所の仙台駅に行ったのですが、集まっていた大学生の数にまず驚かされました。大学生が参加して行くという話は聞かされていたのですが、東北各地の大学生はもちろん、関東や関西、一番遠いところでは広島から来た人など、総勢150人を超える大学生が集まっていました。皆この番組に参加する為に自費で宮城まで来たそうで、この番組で活動したいという各学生の意識の高さを感じました。

そこからNHKが用意したバスで石巻専修大学に移動しました。そこでその日一番驚いたのが、宮城出身のお笑い芸人であるサンドウィッチマンが司会として撮影に登場したことです。このことはどの大学生も知らなかったようで、皆とても驚いていました。

その後今回の講師であるコミュニティデザイナーの山崎亮さんも登場し、撮影が始まりました。撮影の流れとしては、午前中は事前に活動していた大学生の報告を聞き、午後からは午前中の内容を基に大学生同士で意見を出し合うというものでした。

午前中に行われた活動報告を聞いていて特に印象に残ったのはエネルギー問題について研究してきたグループのもので、小さな子供にもエネルギーについて考えてもらうために公園の遊具で電気を発電させるという構想には感心させられました。

午後からの活動には私も実際に参加して他の大学生と意見を交わしたのですが、原発問題についてただ廃止を叫ぶのではなく安全な原発を造るという考えはないのかといった、これまでの私の頭の中には無かったような新しい意見を多数聞くことができ、有意義な時間を過ごすことができました。

今回の撮影を通じて、他の地域の大学生にも震災後の東北について真剣に考えている人が多くいることを知りました。こういった人たちと私達被災地の人間が共に知恵を出し合い協力していくことで、石巻を始め東北をより良い復興へと導いていくことができるのだと思いました。

ちなみに、今回撮影した回の放送は既に終わりましたが、この東北発☆未来塾は毎週金曜の夜11時30分からEテレ（教育）で放送されているので、興味を持た



れた方は是非ご覧になってみてください。

（内海善樹、久道溪、横山風太）

←撮影風景



津波の際の避難場所となる人工地盤「望海橋」

## 奥尻島の復興～悩みは漁業後継者難～

「船はみんな青森へ売られてしまった」

北海道・奥尻島のイカ釣り漁師の林清治さんは、こう振り返ります。奥尻島は1993年の北海道南西沖地震の際に津波被害で200名あまりの犠牲者を出しました。

今年1月、津波被害からの復興例として石巻の復興の参考にするため、私は奥尻島を訪れました。

全国から多額の義援金が集まったためこの島の復興は比較的順調に進み、5年後の1998年には完全復興宣言を出すに至りました。被災者の漁師はこの義援金で、新造の高性能漁船を買うことができましたが、その船がすでに、奥尻から青森へ売られていったというのです。

復興を遂げた奥尻で、なぜそのようなことが起きたのか、私は不思議に思いました。

津波被害の後、中心被災地だった奥尻島青苗地区の住民のうち高台移転を希望する人々は移転しました。その中には、漁師さんも含まれていました。

「漁師は海の見えないところでは生活できない」と言われます。私は、てっきりそうだと思っていました。

が、現在の漁師さんは高台でも生きていけるのだそうです。海まで行かなくとも天気は携帯電話で確認できます。高台に家があっても、自分の船までは軽トラックで5分です。とすれば、安全な高台に家を持つほうが海の災害に遭う危険が小さいのです。津波被害に遭った多くの漁師さんが、義援金により、高台に家を建てました。

中には、受け取った多額の義援金を目いっぱい使い大きな家を建てた人がいるそうです。その結果、現在、固定資産税の支払いに苦しんでいるとのこと。これを復興のもう一面と呼ぶべきでしょうか。

島の漁業界最大の悩みは、後継者難です。奥尻島では今、漁を継ぐ人が減少しています。漁師が持っていた高級漁船は、船主が高齢化により引退し、後を継ぐ子供がいない場合、島の外に売られていきます。

林さんは「せめて売る時は必ず島の漁協に売る約束があれば、義援金で買った船が島の漁で生かされたのに」と悔しがります。高性能の漁船は、より高値をつけてくれる業者のところへ、つまり多くが青森県へ売られていった、というのです。

漁業の後継者問題が奥尻島の復興に影を落としています。多額のお金があっても、それだけでは住民の望む復興にははならないようです。

（丸岡泰）

皆様からのご意見・ご感想をお待ちしております。

E-mail [senshu-maruoka@inter7.jp](mailto:senshu-maruoka@inter7.jp)